

○アーバンシテイ不動産・全景
大きなビル。

○同・営業所
明るい店内。
カウンターでは多くの社員が笑顔
で接客し不動産を紹介・商談して
いる。

○同・会議室

「会議室」と札がかかった扉。
橋本の声「これが今度の人事異動だ」

橋本満(48)が机の上に人事異動の
書類が乱暴に置く。

橋本の向かいに立っている蓬莱敬
臣(32)が書類を取り内容を見る。

蓬莱の名前があり、「小芝営業所
副所長」と書かれている。

蓬莱「(嬉しそうに)俺が副所長ですか」
橋本「喜ぶな。お前の同期はもうほとん

どが所長か管理職に上がってきているんだぞ」

蓬萊、うなだれる。

蓬萊「はい」

橋本「おまけにその小芝営業所の新所長。

誰に決まったと思う。天堂だぞ。まだ入社五年目の」

蓬萊「天堂くんが。すごいですね」

橋本「ああ、あいつはすごい奴だよ」

橋本、苦々しい表情になり煙草を取り出す。

蓬萊「部長、ここは禁煙で：」

橋本「おっと」

蓬萊、ポケットからシュガーレスのど飴を取り出して橋本に差し出す。

蓬萊「これで良かったら、代わりに」

橋本「ああ、悪いな」

橋本、飴を受け取り口に放り込む。飴を味わいつつ深いため息。

橋本「蓬莱。俺はなあ、能力だけで言ったらお前は天堂に負けてないと思ってるよ。頭の回転も悪くないし小さいことにも気が付ける。なのに、どうしてこんなに差がついてると思う？」

蓬莱「：さあ」

蓬莱、ヘラヘラと首を傾げる。

橋本「積極性だよ。あいつはどんな客にも真正面から向き合ってる。クレームもトラブルにも積極的にぶつかっていつて解決に向けて尽力している。そんな前向きなところが評価されてる」

蓬莱、納得した表情。

橋本、呆れた大きなため息。

橋本「：俺はお前が入社した時、いや面接の時から見てきてる。お前はいい奴だし、俺としても所長に推してやりたかった。でもなあ、今のお前には天堂を越えて所長に推せるだけの材料が何

もないんだよ」

蓬萊、困ったような表情で橋本を見る。

橋本「面接のときのお前は情熱に満ちていたな。絶対合格してやるんだって目が輝いてた」

橋本、悲しそうに蓬萊の肩を叩く。

橋本「十年前のお前はどこに行っちゃまったんだ？」

蓬萊、何か言おうとして止めてうつむく。

橋本「とにかく、そういうわけだから。異動の準備、進めとけよ」

蓬萊「はい」

橋本、蓬萊の肩を優しく叩くと会議室を出ていく。

蓬萊、その背中を見送る。

扉が閉まると大きくため息をついて机に腰を下ろす。
書類を拾い上げ見つめる。

蓬萊「：あんなこと言われても、あの時とは事情が違うから仕方ないよ」
蓬萊、自分の名前を指で弾く。

○住宅街

閑静な街並み。
大量の家財道具を積んだ軽トラックがノロノロと向かってくる。
運転手は蓬萊、助手席で地図と風景を何度も見比べているのが蓬萊麻由子(30)。
麻由子、何かを見つけて笑顔で指差す。

麻由子「あつた！あそこ赤い屋根の家！」

蓬萊「え、どこ？」

麻由子「ほらあそこ：って、余所見しちやダメ。えーと（地図を見て）左曲がって」

軽トラックは左折し住宅街を進んでいく。

正面に赤い屋根の一軒家が見えてくる。

蓬萊「あれかぁ」

麻由子「あれだねえ、私たちの愛の巣」

麻由子、蓬萊の肩に頭を乗せる。

蓬萊、麻由子の頭を撫でようと手を伸ばす：が、その瞬間軽トラックが揺れて慌ててハンドルを両手で握る。

蓬萊「あ：危なかった：」

麻由子「ごめん私のせいだ」

蓬萊「いや、俺も不注意だった」

麻由子「イチヤイチヤは着いてからだね」

蓬萊、しっかりと前を向いたままうなずく。

○蓬萊家・全景

赤い屋根の一軒家。庭には植木などはない。

○同・駐車場

建物正面の駐車スペースに軽トラ
ックを停めて蓬菜と麻由子が降り
てくる。

麻由子「とうちやく！」

蓬菜「早速中に入ろう！」

蓬菜、鞆から鍵を取り出しつつ玄
関へ向かう。

麻由子、建物の外観を眺めている。

○同・玄関

蓬菜、鼻歌混じりに鍵を開け玄関
ドアを開ける。

蓬菜「オープン！」

蓬菜、室内に入っていく。
麻由子、駐車場から駆けてきて後
に続く。

麻由子「あー待って待って」

○同・リビング

まだ何も家具が入っていない伽藍
洞の部屋。

中心に立った蓬菜と麻由子、しみ
じみと部屋を眺める。

麻由子「ステキ。思ったよりずっとキレイだね」

蓬菜「ああ：長いこと住んでないって聞いてたから心配してたけど、すごくイイね」

麻由子「小芝っていったら最近人気の街だからなかなかいい物件見つからないんでしょ？超ラッキーだね私たち！」

蓬菜「ああ。叔母さんに感謝だ」

蓬菜、手を合わせて頭を下げる。

蓬菜「叔母さん、このご恩は一生忘れません」

麻由子も真似して手を合わせる。

麻由子「感謝感謝です、叔母さん」

麻由子、その手をパンと鳴らす。

麻由子「さっ、それじゃあ作業始めちゃ

おう！

蓬菜「ああ」

部屋を出ようとしたところで麻由子の携帯が鳴る。

麻由子、駐車場に向かいつつ電話に出る。

麻由子「もしもし、お母さん？あとどれくらいでこっち着きそう？」

○同・玄関

蓬菜は先に靴を履き終え、麻由子の靴を履きやすいように揃えてやる。

麻由子「うん：うん、わかった。じゃあ私たちは先に作業進めてるから。あ、箆筒とかは男手来てからじゃないと無理だけど」

麻由子、片手で感謝を示しながら靴を履き蓬菜と共に外へ出る。

○同・駐車場

蓬萊、軽トラックの荷台を開き段

ボール箱を降ろし始める。

ふと手が止まり考え込む。

麻由子、後ろで電話している。

麻由子「うん：うん：わかったわかった、

それじゃあよろしくね、待ってるよ。

それじゃ！」

麻由子、携帯をズボンのポケット
に押し込むと蓬萊に近づく。

麻由子「お待たせ！」

段ボール箱を受け取ろうと手を伸
ばすが、考え込んでいる蓬萊は気

付かない。

麻由子「タカくん？タカくん、どうした
の？」

我に返り麻由子を見る蓬萊。

蓬萊「あ、ああ：ごめん」

麻由子「どうしたの？ボーンとしちやつ
て。何かあった？」

蓬萊「何もないよ。ちよつとボーっとしてただけ」

蓬萊、段ボール箱を麻由子に渡す。

麻由子「本当？あ、また何か仕事のこと
で悩んでるんでしょ。怒られた？タカ
くんてばメンタルお豆腐並みだから」
蓬萊「そんなんじゃないって。お義母さ
ん、なんて？」

麻由子「あ、あと30分くらいで着くって」

蓬萊「了解。それ、台所持ってって」

麻由子「はい」

麻由子、軽やかな足取りで段ボ
ール箱を運んでいく。

蓬萊、次の段ボールを取ろうとし
て、かなり重くて驚く。

蓬萊「え、なんだこれ？」

段ボールを引き寄せて開ける。

中には分厚いアルバムが数冊と裸
のままの写真がたくさん入ってい
る。

蓬菜「：なるほど」

蓬菜、段ボール箱の蓋を戻して抱えるとよろけながらも部屋へと持っていく。

○同・洋室

段ボール箱を持って入ってくる蓬菜。

やっこの思いで下ろすとすぐに蓋を開ける。

一番上のアルバムを手に取ると腰を下ろし、表紙をめくる。

蓬菜（22）と麻由子（20）が笑顔でポーズを取っている写真、法被を着て焼きそばを焼いている麻由子の写真、食べ物や酒の空き缶が散乱した床で友人A（22）や友人B（21）と眠りこけている蓬菜の写真。笑顔の蓬菜と麻由子の写真がたくさん並んでいる。

蓬萊、笑みを浮かべながらじつくり写真を眺めている。

麻由子の足音が聞こえてくる。

麻由子の声「タカくん？どこー？」

開け放されている部屋の前を一旦通り過ぎて、戻ってくる麻由子。

麻由子「あ、こんなところにいた！」

麻由子、蓬萊に近づく。

麻由子「もー、こんなとこで何を！」

蓬萊の手元を見て、麻由子が目を見開く。

麻由子「わーなつかしい！」

麻由子、笑顔になると蓬萊の手からアルバムを奪い床に座ると写真を眺め始める。

蓬萊「ちよつと麻由ちゃん、俺見てたんだけど」

麻由子「今まで見てたんでしょー？今度は私に見させてよ。わーこれ！学祭の写真？なつかしー！みんな若ーい」

蓬萊、麻由子の隣に座り直し二人
でアルバムを眺める。

麻由子「あ、コレ」

麻由子、情けない表情の蓬萊(20)
とピコピコハンマーを持った麻由
子(18)の写真を指差す。

麻由子「覚えてる？この時が初めてタカ
くんとしゃべった時なんだよ」

蓬萊「覚えてるよ：とんでもない新人が
来たって思った」

蓬萊と麻由子、見つめあって笑う。

○回想・蓬萊と麻由子の大学・全景

T・12年前。

○同・演劇サークル部室前

「演劇部」と手書きの札が扉にか
かっている。

麻由子(18)がやってくる。

札を確認し、深呼吸する。

麻由子「よし」

取っ手に手をかける。

蓬萊の声「うわあああ」

部屋の中から悲鳴が聞こえ、慌てて飛び込む麻由子。

○同・演劇サークル部室内

薄暗い室内。

蓬萊が麻由子に背中を向けて立っている。足が震えている。麻由子、不思議そうに近づく。

麻由子「あの…？」

蓬萊、怯えた表情で振り返り、麻由子の顔を見るとその肩を掴み影に隠れる。

蓬萊「あ…あそこ…」

蓬萊が震えながら指を指す。

麻由子、その先を見る。

ゴキブリが一匹。

麻由子「あ…ゴ…」

蓬萊「（半泣きで）言わないでええ！その名前だけは！聞きたくない！」

麻由子「え、あの：先輩？もしかして：アレ、怖いとか？」

蓬萊「き、君どうにかして、アレ」

麻由子「（呆れて）ええ：」

麻由子、隣のテーブルからピコピコハンマーを手に取る。
そつとゴキブリに近づき

麻由子「ちえすとおおっ！」

思い切り振り下ろす。
部室内にピコピコハンマーの音が響き渡る。

一瞬の静寂。

麻由子、そつとピコピコハンマーを持ち上げ覗き込む。

蓬萊「：やったか？」

麻由子、蓬萊を振り返り親指を立てて見せる。

蓬萊、安堵の表情を見せる。

麻由子、ティッシュでピコピコハ
ンマーを拭いながら、

麻由子「じゃあコレ、処理しといてくだ
さいね」

蓬菜「え、俺が？」

麻由子「女の子に戦わせといて後処理も
してくれないんですか？」

蓬菜「いや後処理できるくらいなら最初
から自分でやってるし！」

蓬菜、ふと麻由子の顔をジッと見
つめる。

麻由子「なんです？」

蓬菜「君：誰？」

見つめあう蓬菜と麻由子。

○もとの蓬菜家・洋室

笑いあっている蓬菜と麻由子。

蓬菜「ホント、あのときの麻由ちゃんか
っこよかったなあ」

麻由子「私がかっこよかったんじゃない

て、タカくんが情けないの。今でもダメなんだもんなあ、ゴキ：

蓬萊、麻由子の口を塞いで

蓬萊「その名前は出さないで」

麻由子「もう、弱虫」

蓬萊「仕方ないだろ、怖いんだから」

麻由子、続けてアルバムをめくっていく。

麻由子の手が止まる。

リクルートスーツを着た蓬萊(22)と私服の麻由子(20)が自撮りしている写真。

派手にデコレーションしてあって

「記念日！」と書かれている。

麻由子「これも懐かしいね」

蓬萊「ああ：そうだな」

麻由子「私の、一番の記念日だよ」

麻由子、微笑んで蓬萊に肩を寄せ
る。

○回想・蓬萊と麻由子の大学・全景

T・10年前。

○同・演劇サークル部室内

麻由子が一人で衣装に手縫いでレースを縫いつけている。
スーツ姿の蓬萊が扉を開けて入ってくる。覇気のない顔。

蓬萊「おつかれー」

麻由子、作業に没頭していて顔を上げないまま挨拶を返す。

麻由子「おつかれさまでーす」

蓬萊、部屋を見回しつつ麻由子の向かいに腰を下ろす。

蓬萊「皆は？」

麻由子「今日は体育館で練習。私はコッチの仕事があるから行ってないけど」
蓬萊「あーそっか、もう学祭の練習やってるんだっけか」

蓬萊、力なく机に突っ伏す。

麻由子、チラリと蓬菜を見る。

麻由子「どうしたの？全然元気ない」

蓬菜「わかる？」

麻由子「就活、上手くないかない？」

蓬菜「麻由ちゃんすごいね、俺何も言っていないのに」

麻由子「いや、見たらわかるから」

麻由子、苦笑しつつ衣装を机に置いて針を裁縫箱に戻す。
向かいの蓬菜にちゃんと顔を向ける。

麻由子「やっぱりそんなに大変なんだ？
就活って」

蓬菜、だらしなく机に突っ伏したまま。

蓬菜「大変なんだよ：今はもう氷河期じゃないとか言うけどさ、就活自体が楽になったわけじゃないし？未だに圧迫面接はあるし」

麻由子「豆腐メンタルのタカくんには厳

しい話ね」

蓬菜「そうそう、豆腐メンタルの俺には
：つて、悪かったな」

麻由子、笑って立ち上がる。

部屋の隅のカフェスペースに近づ
きコーヒ―を淹れる用意を始める。

麻由子「飲むでしょ？」

蓬菜「砂糖二杯」

麻由子「わー大分お疲れだ」

麻由子、手書きで蓬菜の名前が書
かれたマグカップにティースプー
ン山盛りの砂糖を二杯入れる。
ドリップコーヒ―をセットして保
温ポットから直接お湯を注ぐ。

蓬菜「今朝から企業説明会2件だろ、集
団面接1件。昨日も面接2件受けてき
たし、明日もまた朝から説明会のハン
ゴの予定でさ：ホント嫌になる」

麻由子「聞いているだけでウンザリしちゃ
うね。内定は？」

蓬菜「あつたらこんなに受けようとして
ないよ」

麻由子「確かに」

蓬菜と麻由子のマグカップを手に
持った麻由子が机に戻ってくる。

麻由子「はい、どうぞ」

蓬菜「ありがとう」

麻由子からコーヒを受け取った
蓬菜、一口飲んで味を噛み締める。

蓬菜「はー：甘い：落ち着く」

麻由子、蓬菜の隣に座るとコーヒ
ーを飲む。

蓬菜「俺就活向いてないのかもなあ：こ
のまま決まらないまま卒業して無職に
なりそうな予感が：」

麻由子、頭をポンポンと叩く。

麻由子「それだったらウチに来たらいい
よ」

蓬菜、目を丸くして麻由子を見る。
麻由子、平然としている。

蓬萊「え、それ：どういう意味？」

麻由子「私は卒業後親の跡継ぐって決まってるし、経営も問題なさそうだしさ。ウチに嫁に來ればいいじゃん。タカくん一人くらい養えるよ？私」

蓬萊、言葉に詰まる。

麻由子「まあ学生結婚になっちゃうけど別にいいよね。ウチの両親もタカくん大歓迎って言ってたし。しばらく専業しつつノンビリ仕事探すんでもいいし、なんならウチで就職するっていう手も

蓬萊、慌てて麻由子の言葉を遮る。

蓬萊「ちよ、ちよつと待って麻由ちゃん」

麻由子、不思議そうに蓬萊を見る。

麻由子「何か問題あった？」

蓬萊「いや問題っていうか：」

麻由子「タカくん、私と結婚するつもりなかった？」

麻由子、蓬萊の頭を再度ポンポンと叩く。

蓬萊、慌てて手を振り払う。

蓬萊「いやいやそうじゃなくて！」

蓬萊、困ったような顔で麻由子を見

る。

蓬萊「：そういうことは、男から切り出すもんだろ」

麻由子「どっちでもいいじゃん」

蓬萊「良くない！それにさすがに：奥さんに養ってもらっているのは：」

麻由子「えー？別に今どきおかしくないっしょ」

蓬萊「俺のプライドの問題なの！」

蓬萊、マグカップを机に置いて、改まって麻由子に向かい合う。

蓬萊「俺、ちゃんと自力で就職する。そしてたらちゃんと俺の方から、君にプロポーズさせてくれ。麻由ちゃんのこと：ちゃんと自分の力で守っていききたいと思ってるから」

麻由子、満面の笑みを浮かべる。

麻由子「嬉しい。待ってる」

蓬萊、微笑んで頷くとマグカップのコーヒを一気に呷り立ち上がる。

蓬萊「よっしゃ気合入った！ちよつと教授の所行ってくる！」

麻由子「いつてらっしゃい！」

蓬萊、部屋を出ようとして入口で立ち止まる。

振り返って麻由子を見る。

蓬萊「最速で就職決めてプロポーズするからな。準備して待ってるよ！」

駆け足で出ていく蓬萊。

その背中を見送る麻由子。

麻由子「超楽しみ」

麻由子、笑みが零れるのを止められない。

○もとの蓬萊家・洋室

蓬萊に寄りかかり、写真を指で撫

でている麻由子。

蓬萊、優しい顔で写真を見ている。

麻由子「あの後就職決まるの早かったよ

ねーやればできるじゃんって思った」

麻由子、蓬萊の頭をポンポンと叩く。

蓬萊「そりや俺も必死だったし」

麻由子「プライドって奴？」

蓬萊「そう」

麻由子「よくわかんない」

蓬萊「うん、君はそうだよな……。そんな

ところが好きなんだけどさ」

麻由子「奇遇だな、私もそんなタカくん

が好きよ」

蓬萊と麻由子、見つめ合い顔を寄

せ合って：もう少しで唇が触れ合

う、というところで玄関が開く音

が響いて、奥寺小百合(60)の声が聞こえる。

小百合の声「麻由子ー、敬臣くん、ど

こにいるのー？」

慌てて立ち上がる麻由子。

麻由子「やばっ！（玄関に向かって）今

行くー！」

部屋を出ていく麻由子。

蓬萊、その背中を見送ってからアルバムを見る。

結婚式の写真。

蓬萊、微笑んでアルバムを閉じる。

○同・リビング（夜）

部屋のあちこちに蓋の開いた段ボール箱が置いてある。

壁には蓬萊と麻由子の写真がプリントされたカレンダー（3月）がかかっている。

テレビとテーブル、ソファが置いてある一角は片付いている。

そこにスーパリーのオードブルとカップそばを並べ、向かい合って座

る蓬萊・麻由子・小百合・奥寺浩

一郎(64)。

紙コップのお茶を手に取って

一同「かんぱーい」

それぞれ食べ始める。

蓬萊「本当に今日は助かりました、ありがとうございます」

奥寺「いやいや、力が必要な時はいつでも呼んでくれ。まだまだ若いものに負ける気はしないからな」

小百合「何言ってるんですか。しょっちゅう『あーつかれた、煙草吸ってくる』とか言ってる抜けてたくせに」

奥寺「腕力はあるても体力は衰えとるんだ、仕方ないだろう」

麻由子「煙草やめたら？お父さん」

奥寺「それとこれとは関係ないだろう」

蓬萊「いえお義父さん、煙草吸ってると体力低下するっていいますし、おやめになった方が……」

奥寺「おい敬臣くん、ここは男同士私の味方をしてくれんのか」

小百合「あなたの健康を思つてのことですよ」

麻由子「そーそー」

奥寺、眉間に皺を寄せて席を立つ。

奥寺「トイレ行ってくる」

麻由子「あ、逃げた」

蓬萊「言わない方が良かった？」

小百合「いいのいいの、凶星突かれて拗ねてるだけだから」

麻由子「昔からこうだもんね」

蓬萊、ドアを気にしながらそばをすすすする。

小百合「もつといいもの買つてくればよかったのに。それか出前とか」

麻由子「片付けとか面倒じゃない、これでいいの。たまには美味しいでしょ」

小百合「：まあ確かにね」

トイレから奥寺の大声が聞こえる。

奥寺の声「おい紙が入つとらんぞー！」

麻由子「（立ち上がった）やば、忘れてた！」

麻由子、段ボール箱を漁ってトイレットペーパーを一つ手に取る。

小百合、麻由子に近付き手からトイレットペーパーを取り上げる。

小百合「母さんが届けてあげる。あんたは食べてなさい」

麻由子「あ、ありがとう」

小百合、部屋を出ていく。

小百合「もうお父さんったら、二人の新居で早速何やってんですか！」

麻由子、蓬菜の隣に戻ってくる。

麻由子「もう、お父さんてば」

蓬菜「でも俺、お義父さんのああいうとこ好きだよ。ウチの親父みたいに偉ぶ

ってるわけでもないし」

麻由子「そう？それならいいけど……」

蓬菜「それより、ホラ。このエビフライ、

結構レベル高いぞ」

蓬菜、麻由子の紙皿にエビフライを乗せる。

麻由子「ありがとう！」

麻由子、エビフライをほおぼる。

麻由子「んーおいしい！」

蓬菜「明日平日だし、書類関係片付けに行かなきゃだな」

麻由子「そうだねえ：明日おやすみ？」

蓬菜「明後日まで有休取ってる」

麻由子「じゃあ明日は市役所デートだ」

蓬菜「あんまりムードないな」

麻由子「婚姻届出すとき思い出している

じゃん？」

蓬菜「あんまり思い出したくない：」

麻由子「あの時さあ、タカくん実印押し

忘れてて窓口でパニックになっちゃっ

てさあ：」

蓬菜「やめろって」

麻由子「（蓬菜の真似をして）すみませ

んすみません、確か持ってきてるはず
なんです、すみません！」

蓬萊「わーっ！だまれこのお！」

蓬萊、じゃれて麻由子に飛びかか
る。麻由子も嬉しそうに悲鳴を上
げる。

小百合と奥寺が戻ってくる。

小百合、怒りの形相。

小百合「なんですか食卓でみつともな
い！」

慌てて起き上がり正座する蓬萊と

麻由子。

蓬萊・麻由子「すみません！」

小百合、蓬萊と麻由子の前に立つ
と説教を始める。

小百合「まったくあなたたちは！仲が良
いのは結構だけど年齢を考えなさい。
だいたい親が来ている時にまでいちゃ
つくだなんて！」

奥寺、説教する小百合の隣で何事

も無かったように席につきそばを
すする。

蓬菜と麻由子、そつと顔を見合わ
せ苦笑い。

○市役所・全景

○同・エントランス

自動ドアが開いて蓬菜と麻由子が
出てくる。

蓬菜「よし、今日の仕事終了」

麻由子「ねえ、ちよつと行きたいトコあ
るんだけど」

蓬菜「いいよ、どこ」

麻由子「まずは出発！」

麻由子、嬉しそうに蓬菜の手を引
いて車まで走り出す。

○カフェ

落ち着いた霧囲気のカフェ。

静かな音楽が流れている。

ウェイターがコーヒーとミックスジュースを運んでくる。

麻由子の前にミックスジュース、蓬萊の前にコーヒーが置かれる。

ウェイターが去った後、飲み物を入れ替える蓬萊。

それぞれコーヒーとミックスジュースを一口飲む。

蓬萊「うまつ」

麻由子「こつちも美味しい」

麻由子、カップを置くとポーチから紙を取り出す。

赤ちゃんのエコー写真。

まだ小さいが確かに黒い塊が写っている。

嬉しそうに眺めている麻由子。

蓬萊「俺にも見せて」

蓬萊、写真を受け取りマジマジと見つめる。

蓬萊「ホントなんだな。ホントに、夢じやないんだよな」

麻由子「つねってあげようか」

蓬萊「それは遠慮しとく」

蓬萊、エコ―写真から目を離さない。
い。

麻由子「もー、そんなにじっくり見てたら穴空いちやうよ」

蓬萊「だってさあ：麻由ちゃんも人が悪いよな、何にも言わないでいきなり産婦人科連れてくとか」

麻由子「だっていちいち『できちゃったかも』とかって会話いらなくない？さつさと一緒に病院行ってもらった方が
確実じゃない」

蓬萊「まあそうかもしれないけどさ、心の準備っていうか」

蓬萊、眉間に皺を寄せる。

○回想・産婦人科診察室

男性医師と向かい合って座っている麻由子と蓬菜。

蓬菜、驚いて立ち上がる。

蓬菜「えーっ！ほほほほ本当ですか！本当ですか！やったあああ！父親になるぞおおよっしやあああ」

テンション高くはしゃぐ蓬菜。

苦笑いの麻由子。

呆気にとられている男性医師。

蓬菜の声「前もって言うておいてくれたら先生の前で恥かくこともなかったのに」

○もとのカフェ

蓬菜、溜息をつきうなだれる。

蓬菜「俺、しばらくあの病院行けない」

麻由子「うん、あの喜びようはちよっと予想外だったな私も。でもまあ、それだけ嬉しかったってことでしょ？」

麻由子、蓬菜の頭をポンポンと叩

く。

麻由子「私も、嬉しかったよ」

蓬萊、顔を上げる。

麻由子、微笑む。

蓬萊「うん」

蓬萊、笑顔で頷きエコー写真を麻

由子に返す。

麻由子、受け取ったエコー写真を

鞆に仕舞う。

蓬萊「赤ちゃんかあ。今年は忙しい年に

なりそうだ」

麻由子「激動だよ激動！」

蓬萊「色々揃えなきゃなあ：あ、一部屋

子供用に空けなくちゃ！引っ越しした

てで良かったな。明日にでもベビーベ

ッド買いに行く？」

麻由子「気が早いよ。安定期に入ってか

らでいいって」

蓬萊「そうか？そんなもん？」

麻由子「そんなもんよ」

落ち着いた様子でコーヒーを飲む
麻由子。

蓬萊、テーブル越しに麻由子の手
を両手で握る。

麻由子「な、なに？」

蓬萊「麻由ちゃん：ずっと俺が護るから。

もちろん、こどもも」

麻由子、目を丸くして蓬萊を見つ
めた後微笑む。

麻由子「うん、よろしくね」

蓬萊「よししこうなったらガンガン働い
てガンガン稼がなきゃな！嫌なことか
ら逃げてられないな」

麻由子「おおくその意気その意気！豆腐
メンタル卒業だね！偉い偉い」

麻由子、テーブルから乗り出して
蓬萊の頭をポンポンと叩く。

麻由子「そしたらコレも卒業かな」

蓬萊「えー、たまにはやってよ」

麻由子「なにそれ、タカくんこどもみた

「い」

笑いあう蓬菜と麻由子。

蓬菜の携帯が鳴る。

○同・店の前

蓬菜が出てきて電話に出る。

蓬菜「はい、蓬菜です」

橋本の声「おう、今大丈夫か」

蓬菜「はい！」

○アーバンシテイ不動産・営業所

橋本がデスクで電話している。

橋本「引越しの方は片付いたのか」

蓬菜の声「あ、はい大体は。明日には出

勤できそうです」

橋本「ん？有休は明日まで取ってるんじ

やないのか？」

○カフェ・店の前

蓬菜、植込みの縁に腰を下ろして

電話している。

蓬萊「ええそうだったんですけど：少しでも早く働きたくて」

橋本の声「なんだ急に積極的だな？」

蓬萊「ええ：実は」

○アーバンシティ不動産・営業所

電話している橋本、満面の笑顔になる。

橋本「（大声で）おおそうか！それは良かったな！」

後ろを通った社員が驚く。

蓬萊の声「ええそれで：家族のためにもいつまでも嫌なことから逃げてちゃダメだなんて思いました」

橋本「そうだな、一家の大黒柱としてしっかり支えてやらなきゃな。そうかそうか：」

橋本、満足げにうなづく。

○カフェ・店の前

蓬萊、照れ臭そうに微笑んでいる。

橋本の声「まあ無理しない程度に頑張る

んだぞ。何かあったら相談して来いよ。

俺はお前の味方だからな」

蓬萊「はい。所長昇進のための尽力もお

願いしますね」

橋本の声「ははは、そうだな。天堂とい

い意味で競い合ってくれ」

蓬萊「頑張ります！」

○アーバンシティ不動産・営業所

橋本、電話しながらパソコンを操

作する。

画面は出産祝いの通販ページ。

橋本「うん、うん。そうだな。それじゃ

あ、明日からの新天地、頑張れよ」

電話を切る。

嬉しそうに画面を見つめている。

背後を通りかかった女性社員、パ

ソコンの画面を見て近付いてくる。

女性社員「あら、橋本部長。どなたかおめでたですか？」

橋本「ああ：そうだ、こういう時はどんなのが無難なのかな」

女性社員「そうですね：」

橋本、女性社員の説明を熱心に聞いています。

○カフェ・店内

蓬萊が席に戻ってくる。

麻由子「仕事の電話？」

蓬萊「橋本部長。引越し無事に済んだかって。よく気にかけてくれるんだ」

麻由子「へえ、ステキな上司ね」

蓬萊「うん、妊娠のこと報告しちゃった」

麻由子「えーもう、まだ三か月なんだよ早すぎるよ」

蓬萊「だって嬉しくてさあ」

麻由子「もー：まだあんまり誰にでも言

わないで。報告は基本的に安定期に入
ってからだよ？」

蓬萊「それってどれくらい？」

麻由子「んー：六か月過ぎたくらいかな」

蓬萊「えーそんなに黙ってなきやなの」

麻由子「お互いの両親にもまだ秘密！だ

からね？」

蓬萊「はい」

肩を落とす蓬萊。

麻由子、苦笑。

○住宅街

蓬萊と麻由子を乗せた赤い車が走
っている。

○車内

蓬萊が運転し、助手席に麻由子が
座っている。

蓬萊「麻由ちゃん、気持ち悪くない？酔
ったらすぐ言っただろ？」

麻由子「全然平気だった。今までそんなこと聞いたことないくせに」

蓬萊「だって妊娠したら気持ち悪くなるっていうし」

麻由子「まだ悪阻も出てないから平気。

もう、今からそんなんでタカくんの方こそ大丈夫？」

蓬萊「だって護るって決めたから！」

麻由子「（苦笑しつつ）わかってるよお」

○住宅街

遠くの方、進行方向から2 tトラックがやってくる。

車内の男はラジオの音楽に体を揺らしながら片手で携帯を操作している。

蓬萊と麻由子、談笑している。

トラックが近付いてくる。明らかに動きがフラフラ。

蓬萊と麻由子のすぐ目の前にトラ

トラックが飛び出してくる。
蓬萊、驚いてハンドルを切る。
トラックの男も蓬萊の車にやっと
気付き驚き慌ててハンドルを切る。
住宅街にタイヤのスキール音が響
く。
トラックと蓬萊の車、ギリギリぶ
つからずすれ違う。
蓬萊の車、壁と衝突寸前で停止。
トラックはそのまま走り去ってい
く。

○車内

蓬萊はハンドルに倒れこんでいる。
麻由子はシートにもたれかかって
いる。
ゆっくり体を起こす蓬萊。

蓬萊「いって…なんだ今の…」

近くを歩いていた妹尾直樹(25)と
藤木大志(25)が駆け寄ってきて窓

をノックする。

妹尾 「大丈夫ですか！」

蓬萊、軽く手を振ってみせ、麻由子を振り返る。

蓬萊 「麻由ちゃん、生きてる？？」

麻由子、ゆっくりと頭を振りながら体を起こす。

麻由子 「うん：なんだったの今の」

蓬萊 「とにかく降りよう、動ける？」

麻由子 「大丈夫：」

蓬萊と麻由子、よろよると車から降りる。

○車外

降りてきた蓬萊と麻由子に近寄る妹尾と藤木。

妹尾 「大丈夫ですか？どこかケガとか：」

蓬萊 「あ、はい。何とか生きてます。ちよつと痛いけどどこもケガとかはしてなさそうなんです」

麻由子、車をグルグルと確認して
いる。

麻由子「こつちも：特にぶつけてないみ
たい。乗れそうだよ」

藤木「病院とか行かなくても大丈夫です
か」

蓬萊「ホント大丈夫です、ありがとうご
ざいます」

麻由子「タカくん、帰ろう」
麻由子、車に乗り込む。

蓬萊「あ、うん。（妹尾に）じゃ、帰り
ます。お騒がせしました」

妹尾「はい：」
妹尾と藤木、どこか納得していな

さそうな表情。
蓬萊が車に乗り込む。

運転席から会釈すると発車する。
妹尾と藤木、車が去っていくのを

黙って見つめている。

○蓬萊家・全景（夜）

○同・リビング（夜）

濡れ髪でパジャマ姿の麻由子がソファに座ってドラマを見ている。濡れた髪を拭きながら、パジャマ姿の蓬萊が入ってくる。蓬萊、麻由子の背後にそっと近付き後ろから抱きしめる。

麻由子「わぁビックリしたぁ」

蓬萊「麻由ちゃん、お腹大丈夫？気持ち悪かったりしない？」

麻由子「やぁだ気が早いってば。全然平気よ」

蓬萊「だって昼間あんなことあったから。お腹ぶつけなかった？」

蓬萊、麻由子のお腹をさする。

麻由子「うん、どこも痛くないよ」

蓬萊「それならいいけどさあ……。そうだ。もう一回写真、見せてくれない？」

麻由子「エコー写真？」

蓬萊「うん。ダメ？」

麻由子「ううん：わかった」

麻由子、少し表情を固くしながら立ち上がる。

蓬萊、麻由子が座っていた辺りの隣に座りテーブルの上のスナックをつまむ。

麻由子が戻ってきて写真を蓬萊に渡す。

麻由子「どうぞ」

蓬萊「ありがとう」

笑顔で写真を受け取る蓬萊。

エコー写真をマジマジと眺めている。

麻由子、蓬萊の隣に座りその顔を眺めている。

麻由子「：そんなに、嬉しい？」

蓬萊「え？当り前だろ、俺と麻由ちゃんの子だよ？カフェでも言っただろ。ど

したの急に」

麻由子「うん、そうだよね」

蓬萊「麻由ちゃん、嬉しくない？」

麻由子「そんなわけないじゃん、嬉しいよ？」

麻由子、笑顔を見せる。

蓬萊、麻由子を見つめる。

麻由子「マタニティブルーって奴かな？私も気が早いね。ちゃんとママになれるかなって想っちゃった」

蓬萊「麻由ちゃんなら絶対大丈夫だよ、いいママになれる。俺も、いいパパになれるよう頑張るからな」

蓬萊、麻由子を抱きしめる。

麻由子「タカくんは：最高のパパになるよ」

麻由子、そっと抱きしめ返す。

○蓬萊家・全景（朝）

植木が植えられている。まだ葉っ

ばは少ない。

玄関のドアが開きスーツ姿の蓬菜
が出てくる。

蓬菜「それじゃ、いってきます」

蓬菜、振り返り室内に声をかける。

○同・玄関（朝）

私服姿の麻由子が上がり框に立っ
ている。

麻由子「いってらっしゃい」

蓬菜「あー何か離れるの寂しいな」

麻由子「それはおんなじ気持ちだよ。今
日から新しい営業所でしょ？お仕事頑

張ってね。」

蓬菜「うん、いってきます」

蓬菜、手を振って扉を閉める。

麻由子、笑顔で手を振る。

扉が閉まった途端、麻由子の笑顔
が消える。

○同・外（朝）

蓬萊、家を出て駐車場に向かう。
ちようど前を戸成栄子（SS）が通り
かかる。

栄子「おはようございます」

蓬萊「あ、おはようございます！」

栄子「ご出勤ですか」

蓬萊「はい」

栄子「もう出勤なさるのね。お体大丈夫？」

あなたも大変でしょう？」

蓬萊「いえ、これくらいは平気ですよ。」

これから家族も増える予定ですし、沢

山稼いで楽させてやらないと」

栄子、目を丸くしている。

蓬萊「それじゃ、失礼します」

蓬萊、会釈して青い車に乗り込む。

蓬萊の車を見送る栄子。

首を傾げる。

○車内（朝）

鼻歌交じりに運転している蓬菜。
昨日の事故現場を通り過ぎる。
壁に大きな傷ができている。
蓬菜は気に留めていない。

○蓬菜家・リビング（朝）

ソファに座り、エコー写真を見つ
めている麻由子。

○アーバンシティ不動産・小芝営業所・

全景

商店街の一角にある小さいがキレ
イな営業所。
軽い足取りで蓬菜が自動ドアを抜
ける。

蓬菜「おはようございます」

○同・社内

天堂智也（26）と男性社員、女性事務
員が蓬菜を見る。

蓬萊、深々と頭を下げる。

蓬萊「本日からこちらへ異動しました蓬萊敬臣です。よろしくお願いします」

天堂、悲し気な表情で蓬萊に近づく。

天堂「蓬萊さん、お体は大丈夫なんですか。この度はなんと云つたらいいか……」

蓬萊、笑顔で天堂を見る。

蓬萊「やあ、天堂所長！これからよろしくな。先輩だけど部下なんで、遠慮なく何でも指示してください」

天堂「え、あの……」

天堂、困惑している。

蓬萊「俺の顔、何か付いてる？」

天堂「あ、いえそうじゃなくて……」

蓬萊「そう？それじゃ」

蓬萊、天堂に会釈すると営業所の奥へと進む。

蓬萊「すみません、俺のデスクどれになりますか」

女性事務員は困惑した様子で机を指差す。

蓬萊、礼を言って席に座る。

天堂「蓬萊さん……」

蓬萊を見つめている天堂。

○同・全景（夜）

外灯は点いておらず真っ暗。

蓬萊の車が入ってくる。

○同・玄関（夜）

蓬萊が鍵を開けドアを開け入ってくる。

蓬萊「ただいまー」

電気が点き、麻由子が駆け足で出てくる。

麻由子「おかえり、タカくん」

蓬萊「ただいま、麻由ちゃん」

蓬萊、靴を脱いで上がるとリビングへ向かう。

麻由子も後をついてくる。

○同・リビング（夜）

テレビは刑事ドラマが流れている。
テーブルの上、サラミや柿の種、
イワシのかば焼きの缶詰と缶ビ
ルが並んでいる。
蓬菜、ソファで食事しながらテレ
ビを見ている。
麻由子がやってきて蓬菜の隣に座
る。

麻由子「いいなあ、ビール。私も欲しい」

蓬菜「麻由ちゃんはダメだろ、赤ちゃん
に悪影響」

麻由子「わかってるけどさあ、横で匂い
嗅いだら欲しくなっちゃう」

蓬菜の手から缶ビールを取ろうと
する麻由子。
サツと遠ざけて

蓬菜「だーめ」

麻由子「ケチ」

蓬萊「ケチで結構」

麻由子「あーんもう、ダメだって思うと

無性に飲みたくなるー」

蓬萊「うんうん、それはわかる。その気

持ちはわかる」

麻由子「わかつてくれるならさ……」

麻由子、恨めしそうに蓬萊を見る。

蓬萊「：わかったよ、明日からは俺も禁

酒付き合おう。でも、会社の飲み会とか

は許してくれよ」

麻由子、満足そうに頷く。

麻由子「うん、いいよ。目の前にお酒な

かったら平気だから」

蓬萊「仕方ない、これも麻由ちゃんと赤

ちゃんのためだもんな」

麻由子「赤ちゃん産んで、またお酒飲め

るようになったら乾杯しようね。約束」

麻由子、小指を差し出す。

蓬萊、小指を絡める。

蓬萊・麻由子「（歌う）指切りげんまん、
嘘ついたらハリセンボンのーます。指
切った！」

指を離す蓬萊と麻由子。

笑顔で見つめあう。

ドラマは少女が母親のお葬式で大
声で泣きじゃくっているシーン。
蓬萊、テレビを消してリモコンを
放ると缶ビールを呷る。
麻由子、黙って蓬萊の肩に頭を預
けて目を閉じる。

○同・洋室

段ボール箱が散らかったままの室
内。

蓬萊、箱からピコピコハンマーを
取り出してじっと見つめる。
カッコよく構えてみたり、思い切
り壁や床を叩いてみたり。
麻由子が部屋の前を通りかかり蓬

菜に気付く。

麻由子「タカくん、何やってんの」

蓬萊「練習してんの」

麻由子「なんの」

蓬萊「ほら、もし今後家にゴキ：あの黒い虫が出た時にさ、自分でちゃんと倒せるようになってくれないと思ってる」

麻由子「へー偉いじゃん！」

蓬萊「だろ？」

蓬萊、ハンマーを振る。

麻由子「あ、あいつ出た！あっち！」

蓬萊、体を固くしてうずくまる。

蓬萊「や、やっぱ無理！」

麻由子、爆笑。

麻由子「嘘だよ」

蓬萊「麻由ちゃん」

蓬萊、恨めしそうに麻由子を見る。

○同・全景（夜）

植木の葉っぱが茂っている。

○蓬萊家・リビング（夜）

壁のカレンダーは8月になってい
る。

ソファに座り、エコー写真を眺め
ている半袖Tシャツ姿の蓬萊。

エコー写真は最初に見たものと同
じもの。

テーブルの上には缶ビール。

ぐいと一口ビールを飲み、キッチ
ンの方へ目をやる。

○同・キッチン（夜）

長袖の麻由子が調理している背中
が見える。

お腹は膨らんでいない。

火にかけている鍋が拭きこぼれそ
うになって慌てて手で取り、熱さ
で取り落とす麻由子。

麻由子「あつつ！あーもう、やっちゃっ

たあ」

文句を言いながら蓋を拾う麻由子。

○同・リビング（夜）

ソファごしに麻由子を見て笑う蓬菜。

キッチンから振り返った麻由子が蓬菜を見て頬を膨らませる。

麻由子「なによお」

蓬菜「ごめんごめん、なんかちよつと嬉しくてさ」

麻由子、不思議そうな表情で蓬菜を見る。

蓬菜「こういうのを幸せっていうのかなって、改めて思ってたさ」

蓬菜、少し照れ臭そうに笑いながら顔を上げ、麻由子を見つめる。

蓬菜「麻由ちゃん、愛してる。君と結婚できて本当によかった」

麻由子「タカくん……」

麻由子、一瞬目を見開き何かを言
いかけるが涙がこみあげてきて何
も言えない。

麻由子「ばかあ」

麻由子、顔を覆ってその場にしゃ
がみ込む。

蓬萊から麻由子の姿が見えなくな
る。

蓬萊「なんだよ、そんなに恥ずかしがら
なくてもいいだろ麻由ちゃん」

蓬萊、立ち上がりキッチンへ近付
く。

○同・キッチン（夜）

蓬萊、アイランドキッチンごしに
麻由子が座り込んだ辺りを覗き込
む。

蓬萊「麻由ちゃん」

麻由子の姿はない。

蓬萊「え？」

驚く蓬菜。

キッチンに入り辺りを見回すが麻

由子の姿は見えない。

蓬菜「え、麻由ちゃん？」

キッチンを出る蓬菜。

○同・トイレ前（夜）

蓬菜、ドアをノックする。

蓬菜「麻由ちゃん、入ってる？」

返事はない。

蓬菜、首を傾げる。

蓬菜「え、どういうこと？」

トイレから離れる蓬菜。

○同・浴室（夜）

浴室には誰もいない。

○同・寝室（夜）

ダブルベッドの布団が乱れているが、誰もいない。

○同・洋室（夜）

開けたままの段ボール箱が積まれている。

引っ越してきたままの状態。

誰もいない。

蓬萊「麻由ちゃん？え、どこ行ったんだよ、あの一瞬で！」

蓬萊、急いで部屋を出る。

○同・リビング（夜）

蓬萊、戻ってきて鞆から携帯と財布、鍵を取り出してポケットに押し込むと部屋を出る。

○同・玄関（夜）

スニーカーを履く蓬萊。

焦ってなかなか履けない。

玄関には蓬萊の靴しかない。

○同・駐車場（夜）

蓬萊、車に駆け寄り中を確認する。

蓬萊「麻由ちゃん、いる？」

誰も乗っていない。

蓬萊、辺りを見回し庭へ向かう。

○同・庭（夜）

雑草が生えている庭。

蓬萊がやってくる。

蓬萊「麻由ちゃん、どこに麻由ちゃん！」

庭を回る蓬萊。

○同・駐車場（夜）

蓬萊が戻ってくる。

パジャマ姿の栄子が心配そうな表

情でやってくる。

栄子「どうなさったの？蓬萊さん。大き

な声出して。何かお困りごと？」

蓬萊、栄子を見て膝から崩れ落ちる。

蓬萊「戸成さん」

栄子、驚いて駆け寄る。

栄子「大丈夫はどうしちゃったの？」

蓬萊「麻由ちゃんが：妻が：」

栄子「え？」

蓬萊、泣きそうな顔で栄子を見る。

蓬萊「妻が、消えたんです、急に！さっきまでそこにいたのに、急に」

栄子、目を見開く。

蓬萊「戸成さん、見てませんか？ウチの妻、見てませんか？妻は今身重なんです。彼女に何かあったら：」

栄子「ほ、蓬萊さん落ち着いて！ね、落ち着いて。そうだ、ご両親にご連絡してみたら？奥様、そちらに何か言っているかもしれないわよ」

蓬萊「両親：そうですね、そうかもしれない
ません」

蓬萊、携帯を取り出し電話をかける。

栄子、その姿を悲し気に見つめて
いる。

呼び出し音が鳴る。

蓬菜「麻由ちゃん：」

祈るように目を閉じる蓬菜。

小百合が出る。

小百合の声「もしもし：？」

蓬菜「あ、遅くにすみません敬臣です！」

小百合の声「こんばんは敬臣くん、どう

かしたの？」

○奥寺家・キッチン（夜）

急須と空の茶碗二杯が並んでいる。

小百合、携帯で話している。

蓬菜の声「あの：そちらに麻由子、お邪

魔していませんか」

小百合「ええ？」

驚き眉を顰める小百合。

蓬菜の声「あの、さっきまでここにいた
んです。いたんですけど、その：急に

麻由子いなくなっちゃって。部屋中探したけどどこにもいなくて」

奥寺が顔を出す。

小百合、奥寺を見て悲しそうに首を横に振る。

奥寺、苦々しい表情。

蓬萊の声「こつちからの距離を考えると荒唐無稽なこと言ってるのはわかってるんです。でも：」

小百合「敬臣くん、おちついて：」

奥寺、小百合から電話を取る。

奥寺「電話変わったよ、敬臣くん」

蓬萊の声「お義父さん、あの俺：」

奥寺「落ち着きなさい。娘ならこちらに来ていろよ」

小百合、驚いて奥寺を見る。

○蓬萊家・駐車場（夜）

蓬萊、嬉しそうな表情になり立ち上がる。

蓬萊「ほ、本当ですかお義父さん！」

奥寺の声「ああ、だから安心しなさい。

今日はもう遅いから、明日改めてこちらに来るといい」

蓬萊「あ、そうですね：わかりました。

そうします。あの、麻由子にかわっていただけませんか」

奥寺の声「すまない、もう眠っているんだ」

蓬萊「そうですか：あ、それならいいんです。それじゃ明日、そちらへ窺います。それじゃあ、夜分遅くにすみませんでした。おやすみなさい」

奥寺の声「ああ、おやすみ」

蓬萊、満足げに電話を切る。

栄子「ご両親、なんて？」

蓬萊「実家に帰ってるみたいですよ。よかったです、安心しました」

栄子「そう：ご実家に」

蓬萊「はい。夜に騒いですみませんでし

た、戸成さん」

蓬萊、深々と頭を下げる。

栄子「いえいえ、いいのよ気にしないで。

それじゃあ、私は帰るわね。おやすみ

なさい」

蓬萊「はい、おやすみなさい」

蓬萊、笑顔で栄子を見送る。

栄子、何か言いたげな表情で帰って行く。

蓬萊、笑顔で部屋へと戻る。

○住宅街

蓬萊の青い車が走っていく。

蓬萊がトラックと接触しかけた道へ差し掛かる。

道路の隅に、花束が複数置かれて
いる。

蓬萊は気付いた様子もなく通り過ぎていく。

○アーバンシティ不動産・小芝営業所・
全景

橋本の声「（電話）蓬萊が欠勤？」

○同・事務所内

天堂が自席で電話している。

天堂「はい、急遽奥様の実家に行く用事ができたから、と」

橋本の声「あいつの様子は相変わらずか」

天堂「変わりませんよ：何一つ」

天堂、蓬萊の席をチラリと見る。

デスクには蓬萊と麻由子の写真が貼ってある。

○アーバンシティ不動産・事務所

橋本が自席で電話している。

苦い表情。

橋本「そうか：何一つ、か。あいつ：」

天堂の声「どうしたらいいですかね」

橋本「そつと見守るしかないんじゃない

か」

天堂の声「やっぱりそれしかないんです
よね。でも：正直、蓬萊さん見ていると
辛くて」

橋本「そうだな：。あいつ、いつまで逃
げてやがるんだかな：」

橋本、窓の外を見る。
青空が広がっている。

○奥寺家・全景

奥寺が家の前に立って待っている。
蓬萊の車が走ってきて目の前に停
まる。

蓬萊が降りてきて奥寺に頭を下げ
る。

蓬萊「お久しぶりです、お義父さん」

奥寺「おお、来たか。入りなさい」

蓬萊「はい」

奥寺、蓬萊の順で家の中へ入って
いく。

○同・和室

小百合、仏壇に手を合わせている。

足音に気付いて振り返る。

奥寺の声「ここに麻由子がいるよ」

○同・和室の前

奥寺と蓬菜がふすまの前に立っている。

蓬菜「ここですか」

奥寺「さあ、入ってくれ」

蓬菜「はい」

蓬菜、ふすまを開ける。

○同・和室

仏壇と、その前に小百合が座っている。

ぽかんとする蓬菜。

小百合「いらっしやい、敬臣くん」

蓬菜「え、お義母さん？」

蓬萊、部屋を見回して仏壇に目を止める。

仏壇の前、笑顔の麻由子の写真が入った写真立てと骨壺が飾られている。

写真の前には線香が立っている。

蓬萊「え」

蓬萊、立ち尽くす。

奥寺、そっと蓬萊を座らせると小百合の隣に座り蓬萊と向かい合う。

蓬萊「や、嫌だなあお義父さん。こんな

：不謹慎すぎますって、こんな冗談」

奥寺「まだ、思い出せないかな敬臣くん」

蓬萊「思い出すって。思い出すって何をですか。俺は何も忘れてなんか」

奥寺「敬臣くん！」

奥寺、静かに蓬萊を見つめる。

小百合、泣いている。

奥寺「麻由子は。娘は、死んだんだ。あの家に引っ越した次の日に、君と一緒に

に事故に遭って」

蓬萊、奥寺を見る。

奥寺、蓬萊を見返す。

笑顔の麻由子の写真。

蓬萊、写真を見つめ力なく首を横に振る。

蓬萊「嘘だ」

奥寺「本当だ」

蓬萊「嘘だ：嘘だ：」

奥寺「気をしっかり持つんだ、受け止めてくれ」

蓬萊「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！」

蓬萊、叫び声をあげる。一点を見つめて目を見開いたかと思うと、

その場に倒れこむ。

小百合が驚いて駆け寄る。

小百合「敬臣くん！」

奥寺「敬臣くん、しっかり！」

気を失っている蓬萊。

○回想・住宅街・事故現場

フロント部が破損して停車しているトラック。

蓬萊の赤い車が壁にぶつかりフロント部から大破している。助手席側がかなりひしゃげている。

○車内

麻由子は体を挟まれてぐったりしている。運転席側の蓬萊もあちこちから血を流し目を閉じている。

○住宅街・事故現場

妹尾と藤木が自転車で近くを通りかかり事故に気付く。

藤木「おい、あれ。やばくね？」

妹尾「ああ。行くぞ」

藤木「あ、おい」

妹尾が真っ先に現場に走る。

蓬萊の車に近づき、蓬萊と麻由子の姿を見つけて驚く。

妹尾「人だ！おい、おい大丈夫か？」

窓を叩くが反応はない。

藤木は後ろでうろたえている。

妹尾「藤木、救急車呼んでくれ！大至急
って！」

藤木「お、おう」

藤木、現場から離れて電話をかける。
始める。

妹尾、辺りを見回して大きめの石を拾い上げるとフロントガラスを叩き割る。

妹尾「大丈夫ですか！意識ありますか！」

妹尾、フロントガラスから車内を覗き込む。

○車内

ぐったりしている蓬萊と麻由子。

妹尾、顔をしかめる。

蓬萊が苦しそうなうめき声を上げる。
る。

妹尾「大丈夫ですか、体、動かせますか！」

蓬萊、妹尾に力なくうなづく。

藤木が駆け寄ってくる。

藤木「救急車、五分くらいで着くって」

妹尾「サンキュ！それで手貸してくれ。

この人たち車から出すぞ」

藤木「え、俺たちで？」

妹尾「このままにしとけないだろ、早

く！」

藤木「わ、わかったよ！」

藤木、妹尾に近付きフロントガラ

スの破片を取り払う。

藤木「どっちから助けるんだ」

妹尾「……ん」

麻由子の指がかすかに動き、少し

目を開けて顔を上げる。

妹尾、麻由子に気付き声をかける。

妹尾「大丈夫ですか、意識ありますか！」

今救急車呼んでますから！」

麻由子、妹尾と藤木の顔を見てうなづく。

麻由子「：主人を」

妹尾と藤木、顔を見合わせ、麻由子を見る。

麻由子「主人を、先に：助けてください」

藤木「で、でも」

麻由子「：足が」

麻由子の足がひしゃげた車体にはさまれている。

藤木、車の周りを見る。

ガソリンが漏れてきているのを発見。

藤木、妹尾に小声で伝える。

藤木「おい、ガソリン漏れてきてる。早くしないと出火するぞ」

妹尾「：マジか」

藤木「どうすんだよ、妹尾」

妹尾、麻由子を見つめる。

麻由子、ぐったりしたまま妹尾を見つめ返す。

麻由子「お願い、します」

蓬萊、苦しそうに呻いている。

車の下からガソリンがどんどん漏れている。

麻由子、力ない目で妹尾を見ている。

藤木「妹尾」

妹尾、唇をかみしめてうなづく。

妹尾「旦那さんから助けるぞ」

藤木「妹尾……」

妹尾、蓬萊に腕を伸ばす。

麻由子、ホツとした表情。

○車外

蓬萊を抱え、妹尾と藤木が車から離れる。

抱えられたままゆっくりと目を開く蓬萊。

蓬菜「：え？」

妹尾「あ、気が付きましたか！」

蓬菜を横たえる妹尾と藤木。

蓬菜「俺：事故：」

ぼんやりと呟く蓬菜。

ハッと目を開き起き上がる。

蓬菜「麻由ちゃん！」

体中の傷が傷んでうずくまる蓬菜。

妹尾「だ、ダメですよ動いちゃ」

蓬菜「麻由ちゃん：妻は？一緒に車に乗

って：」

蓬菜、車を振り返り、よろめきな

がら立ち上がる。

妹尾と藤木、止めようとするが振

り切る蓬菜。

車に縋り付き、車内を覗き込む。

蓬菜「麻由ちゃん：」

車内で目を閉じる麻由子の姿が見

える。

妹尾「危ないですって、いつ爆発しても

おかしくないから」

蓬菜「麻由ちゃん！」

麻由子が目を開きゆつくりと窓の外を見る。

妹尾と藤木、蓬菜を車から離そうとするが蓬菜は動かない。

蓬菜「麻由ちゃん」

麻由子、車内から微笑み「元気でね」と口を動かす。

蓬菜、目を開く。

車が発火し、一気に車体が火に包まれる。

蓬菜、驚いて少し車から離れる。

車内の麻由子、笑顔。

妹尾と藤木、蓬菜を無理やり車から引き離す。

藤木「危ない！」

妹尾「おじさん、離れて！」

蓬菜「麻由ちゃん……」

茫然としている蓬菜。

燃え盛る車。

状況を理解し半狂乱になる蓬菜。

蓬菜 「麻由ちゃん！麻由ちゃん！！」

車に近づこうとする蓬菜。

妹尾と藤木、力づくで蓬菜を引き

離す。

車から離されていく蓬菜。

麻由子、笑顔で目を閉じる。

蓬菜 「麻由ちゃん！麻由ちゃん！」

炎に包まれる車。

ボンネットから爆発を起こし、激

しく炎上する車。

蓬菜 「麻由ちやあああん！」

鳴きながら絶叫する蓬菜。

○もとの奥寺家・和室

布団に寝かされている蓬菜。

涙をこぼしている寝顔。

仏壇の前、麻由子の写真。

麻由子が蓬菜の枕元に座って微笑

んでいる。

麻由子が蓬萊の頭を撫でる。

蓬萊がゆつくりと目を開く。

蓬萊、麻由子を見る。

蓬萊「麻由ちゃん」

麻由子、微笑む。

起き上がった蓬萊、麻由子を抱きしめる。

蓬萊「麻由ちゃん、麻由ちゃん」

泣きじゃくる蓬萊。

麻由子、笑顔で頭をポップンと叩く。

蓬萊、一瞬大きく目を開き、ゆつくりと目を閉じる。

壁をノックする音。

小百合の声「敬臣くん：起きてる？開けてもいいかしら」

蓬萊「あ、はい」

蓬萊、ふすまを振り返り返事を返す。

前に向き直ると麻由子の姿はない。
蓬萊、薄く微笑みを浮かべる。
ふすまが開き遠慮がちに小百合が
顔を出す。
蓬萊、布団から出て立ち上がり頭
を下げる。

○蓬萊家・全景

植木の葉が少なくなり、うっすら
と雪が積もっている。
普通車が走ってくる。

○同・玄関

玄関ドアを開ける蓬萊。
来客を見て笑顔を見せる。

蓬萊「あ、どうもいらっしやい」
奥寺と小百合、蓬萊に軽く会釈を
する。

蓬萊「どうぞ入ってください」
蓬萊、奥寺と小百合を招き入れる

と奥へと歩いていく。

蓬萊「麻由ちゃん、お義母さんたち来たぞ」

靴を脱ごうとしていた奥寺と小百合、不安そうに顔を見合わせる。

小百合「お父さん、まさかあの子まだ」

奥寺「：とにかく、行こう」

奥寺が先に立ち部屋に入っていく。

○同・洋室

部屋の隅に簡易的な飾り棚が造ってあり、遺影と骨壺、花が飾られている。

蓬萊が手を合わせている。

入口でその姿を見る奥寺と小百合。

蓬萊、振り返って笑顔を見せる。

蓬萊「どうぞ」

小百合、安心した表情で笑顔を見せる。

奥寺、目を細めうなづく。

○同・リビング

テーブルにつく奥寺と小百合。

蓬萊、慣れない手つきでコーヒーを載せたトレイを運んでくる。

蓬萊「すみません、慣れなくて」

小百合、立ち上がりトレイを受け取ろうとする。

小百合「いいいのよ、手伝うわ」

蓬萊「いえいえそんな！お客様ですから」

小百合「あらでも」

蓬萊「座ってください」

奥寺「母さん、座りなさい」

小百合「そう？」

渋々着席する小百合。

テーブルの上にコーヒーカップ、かごに入ったせんべいが並べられる。

× × ×
奥寺、せんべいをかじりながらコーヒーをすすする。

蓬萊「その節はご迷惑をおかけしました」

蓬萊、頭を下げる。

奥寺、チラリと蓬萊を見て

奥寺「ちゃんと生活はできているのか」

蓬萊「ええ、まあなんとかやっています」

小百合、部屋を見回して

小百合「そうね、なんとかって感じね」

蓬萊「(苦笑)お義母さん、意地悪だなあ」

小百合「忙しくても掃除はちゃんとしな

きゃだめよ？埃が溜まると病気がち

になっちゃうんだから」

蓬萊「それ、麻由ちゃんもよく言っ
てました」

小百合「そうね、あの子にもよく言っ

たからね」

奥寺、飾られている蓬萊と麻由子

の写真を眺める。

奥寺「敬臣くんは」

奥寺、コーヒーストをすすする。

奥寺「再婚の予定とか：考えているのか」

小百合「ちよつと、お父さん」

蓬萊、写真に近付き手に取る。

笑顔の蓬萊と麻由子。

蓬萊の背中を見る奥寺と小百合。

蓬萊「麻由子がいなくなつてまだ一年も

経つてないですし、今はまださすがに

そんな気持ちにはなれないです」

蓬萊、写真の麻由子を指で撫でる。

蓬萊「でも」

× × ×

犬の写真を見て泣いている蓬萊。

蓬萊の頭を麻由子がポンポンと叩

く。

麻由子「悲しかったね、タカくん。君は

優しいね」

麻由子、蓬萊の顔を上げさせ見つ

め合う。

麻由子「でもね、いつまでも悲しんでち

やいけないよ。君がずっと泣いている

こと、この子も望まないよ？」

麻由子、蓬萊の頬をつまんで引き上げる。

麻由子「ホラ、スマイルスマイル！悲しい時こそ笑顔を作って、頑張って乗り越えていこ！その方がきつと、この子も喜ぶよ」

麻由子、笑顔。

蓬萊、泣きながら頑張って笑顔を作る。

× × ×

蓬萊、笑顔を作り顔を上げる。

蓬萊「ずっと悲しんでると麻由ちゃんに怒られちゃうから。前向きに考えていこうと思ってます」

蓬萊、振り返り笑顔。

奥寺と小百合、安心した表情。

奥寺「そう言えるようになったなら、それでもいい」

小百合「ええ」

蓬萊「ありがとうございます。正直、麻

由ちゃんを忘れることなんてできる気がしないけど」

小百合「忘れる必要なんてないわ。そのまま受け止めて、乗り越えていってほしいだけよ。私たちもそれを望んでる」

奥寺「君にとっては迷惑かもしれないが、私は君のことを本当の息子のようになっている。君が望んでくれるなら、これからも困ったことがあれば相談してほしい」

蓬莱、涙があふれそうになるのを必死で堪えながら笑顔を作る。

蓬莱「ありがとうございます！」

奥寺、蓬莱の隣に立ち背中を力強く叩く。

小百合、嬉しそうに見つめている。

○同・リビング（朝）

カーテン越しに朝陽が差し込んでいる。

カレンダーは4月。
テレビでは情報番組が開花予想を
伝えている。
テーブルの上はキレイに片付いて
いる。
ソファの上、スーツの上着と書類
鞆が乱雑に置いてある。

○同・キッチン（朝）

流し台はキレイに片付き、洗いか
ごの中には洗ったばかりの皿やマ
グカップが置かれている。
スーツ姿の蓬莱、冷蔵庫から栄養
ドリンクの瓶を取り出して、腰に
手を当て一気に飲み干す。
空になった瓶を軽く水で洗いかご
に入れる。
両頬を軽く叩いて気合を入れると
キッチンを出ていく。

○同・リビング（朝）

蓬莱の携帯が鳴っている。

蓬莱、電話に出る。

蓬莱「おはようございます、どうかしたんですか」

天堂の声「どうかした、じゃないですよ

蓬莱さん！今どこにいるんですか」

蓬莱「え、今から出るところですけど」

天堂の声「今日は店長会議の日なんですけど？」

蓬莱「え、嘘」

蓬莱、驚いてカレンダーを見る。

4月3日に赤丸が付いていて「本社・店長会議」と書かれている。

蓬莱「やべっ」

蓬莱、慌てて準備を始める。

天堂の声「（電話の向こうで）やっぱり忘れてましたよ、あの人」

橋本の声「（電話の向こうで）はー、やっつとしっかりしてきたかと思ったが相

変わらずだなあいつは！」

蓬菜「す、すみません今から急いでいきますんで！」

橋本の声「（電話の向こうで）蓬菜に言っとけ、遅刻したら全員の昼飯奢りな」

天堂の声「聞こえましたか。急いで、安全運転で来てくださいね」

蓬菜「わ、わかりました！」

蓬菜、電話を切ると書類靴を取り部屋を出ようとする。

笑顔の麻由子の写真の前で立ち止まる。

蓬菜「いってきます、麻由ちゃん」

蓬菜、笑顔を浮かべると部屋を出る。

○同・玄関（朝）

蓬菜、靴を履き颯爽と扉へ向かう。扉を開くとその先は真っ白な光。

了